



Title	質疑応答編
Citation	子ども発達臨床研究, 12, 35-46
Issue Date	2019-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72763
Type	bulletin (other)
File Information	080-1882-1707-12.pdf



[Instructions for use](#)

質疑応答編

【凡例】

- ・ここでは、フォーラムの中間での質疑応答と終盤での質疑応答の様子を掲載する。
- ・終盤の質疑応答は、休憩時間中に集めた感想・質問用紙にもとづいて進行し、適宜追加の質問等をフロアに求めた。
- ・“(フロアA)”等は、当日参加者からの質問や意見を意味する。A、B等の記号は、それぞれが異なる発言者であることを意味する。
- ・登壇者はそのまま記名とした（司会：伊藤＝教育学研究院、橘・前場＝附属高松小学校、家村・吉田＝発寒ひかり保育園、中川・東＝美晴幼稚園、篠原＝教育学研究院）。
- ・質疑応答の区切れ目を明確にするために、適宜見出しを構成した。また、質問と回答の関係が分かりやすくなるように、発言意図を損ねないように配慮しながら適宜加筆修正した。

1. 中間の質疑応答部分

(1) 「教科学習」と「創造活動」

(フロアA) 教科の勉強と創造活動、どちらが大事ですか。

(橘) 本校では、教科学習と創造活動という2領域で「分かち合い、共に未来を創造する子ども」の育成を目指しています。だから教科学習と創造活動のどっちかが抜けたら、やはり思っているところには行かないんじゃないかと思います。

(フロアA) ちょっと訊き方を変えて、どちらが重いですか。

(橘) 同じです。

(フロアA) 同じですか。

(橘) はい。

(フロアA) 何となく同じということはないのではないかと感じて訊いたんですけど、絶対同じですか。

(橘) 今回はフォーラムのテーマが異年齢ということだったので、縦割りのことを中心にお話させていただいたのですが、もしお時間があるのでしたら、教科学習の中でこそ育つ子ども像、教科学習じゃないと育たない部分というのが当然ありますので、そちらの方についても論というか、我々の思いがあります。共通しているのは見方、世の中の見え方が変わってくるということです。創造活動をやることによって、世の中の見え方も変わるし、教科学習をやらないと変わらない見え方というものもあるので、どちらもやっぱり同じだなということを考えています。2つの領域は前場が言った通り、カリキュラムを

支える両輪で、それぞれの領域の良さがある、そんなふうに考えています。

(2) 児童との振り返り

(篠原) 後ほどお話をします篠原です。1つ確認でお訊きしたかったのは、途中ビデオを見せていただいた中で、小学校1年生の最初のお迎えのシーンと、あとは最後のジャムを6年生に食べてもらうというシーンが、子どもたちはあのビデオを自分たちで後から振り返る、あのビデオを見て振り返るという活動はあるのでしょうか。もしやられるとしたら、どういう意図をお持ちで先生方がやられるのかも、お聞かせください。

(橘) ありがとうございます。振り返ることもやっております。例えば写真を撮って掲示して、子どもたちと一緒に、あの場面はこうだったよねという振り返りもしますし、動画を見て、この場面はこうだったよねと振り返りもしたりします。その意図としては、本校は道徳の時間をあえて設けておらず、子どもたちの道徳性を文脈の中で、本当に子どもが実感する価値として生み出していくということを重点に置いていますので、道徳に代わる部分というか、あのときの〇〇ちゃんの関わり方がよかったよねとか、あのときの〇〇君のこの発想はすごかったよねということ、やっぱりみんなで共有することによって、それぞれの子どもの良さが見えたり、お互いに価値を共有したり、こういう見方をしたらいいんだねということが分かったりします。

だからやっぱりその瞬間、瞬間で流れていくんじゃなくて、教師から見て、ここが出所だと思ったところについては、振り返ったりもしますし、それについて子どもがノートに一生懸命書いたり、発言したりということは、節目節目で行っていくようにしています。

2. 終盤の質疑応答部分

(司会：伊藤) おそらく皆さん関心が高いのは職員間でどう共通認識をつくっていくかというあたりだと思うのですが、それは最後にうかがうとしまして、まずは簡単に答えていただけそうなところから。たとえば、年長児が年少児にけがをさせるなど、安全面の配慮、責任問題をどうやって乗り越えるか、また乗り越えるためのポイントは？

(1) 異年齢保育ゆえの安全面への配慮

(吉田) 何でもそうなんですけど、最初やるときはかなり抵抗があるんですよ。でもまず職員集団からいうと、先行実践を研究されているところの見学、それから一緒に体験するとか、それが非常に有効だと思います。そして実践をしていくと、親は案外と早く理解してくれます。0歳からの異年齢なんかは、もしかしたら結構抵抗あるかなと思ったんですけど、ほとんどありませんでした。それは今までの異年齢の実践の積み重ねに対するご理解があったからだと思うんですよ。ほとんど抵抗なくすんなり受け入れてくれました。それで特に小さい子のお母さん、お父さんがすごく喜んでくれました。みんなお兄ちゃんやお姉ちゃんたちにかわいがってもらっていると。それはすごく肌で感じるんですよ。

それで、安全面はこれはすごく大事です。特に今回の乳児からの異年齢を始めるときは、これが最大のテーマになりました。それで遊ぶ空間、これをうまく工夫しなきゃと。LaQというブロックがありまして、こんなすごく巨大なものを作れるんですけどね。これを赤ちゃんが飲んだら大変ですよ。それをどこでやるかとか、どういうふうに区分けするかとか。それから乳児が、赤ちゃんたちが落ち着いて

生活できる場所、空間、時間帯、それもすごく今も研究し続けているんですよ。見直しながら進めているんですよ。

責任問題は、例えば赤ちゃんを抱っこさせていいのとかありますよね。それは意外と問題ないですよ。本当に。子どもたちはちゃんと、さっき言ったようにちょっと教えてあげたり注意したりはもちろんしますよ。意外と早く体得するんですよ。

(東) 年長児が年少児にけがをさせるというのは基本的にないです。生活の場面でない。ただ体のサイズが違ったり動きが違うので、不可抗力的にそうした状況が起きかねないということはあるんですけども、一緒に生活や遊びをすることによって、このようなりスクというのは基本的にはないとお考えただいていいと思うんですね。

ただ同じ部屋で過ごすことが多いので、最初のころはまだ家具が十分そろえてなくて、高い椅子に年少児が座るような場合には足置きを付けてあげたり、ロッカーに手が届かないので下の段を年少児が使うとかの配慮は必要ですけど、けがや事故の配慮というのは基本的にまずはないと考えていいと思います。

(2) かかわり方の男女差

(司会：伊藤) 次です。発寒のひかりのVTRでは女兒がお世話する場面が多かったですが、男女差というのはあるんでしょうか？

(家村) VTRでは確かに女の子がお世話している場面が多かったかと思いますが、養護的相互交渉があるかないかでいえば差はないと思います。ただ女の子の方がやっぱりどっちかというとお世話好きな子が多いかなというところはあって、すごくかかわってくれている場面が多いので、ビデオという形になるとどうしても撮りやすかったという部分はあったかなと思います。目に見えてすごくいっぱい動いているので。でも男の子で、じゃあ、それをしていないかというわけでは全然ないかなと。

(吉田) さりげないんです。

(家村) そうですね。さりげないんですね、男の子はどちらかというと。

(3) 「ファミリー」の編成と保育室

(司会：伊藤) 「ファミリー」の編成と保育室の状況を具体的にお聞きしたいという質問も寄せられています。すべてのファミリーが1個のフロアで過ごすか、それとも各ファミリーに保障された保育室があるのかという確認事項ですね。

(家村) ファミリー編成と保育室の状況については、お配りした資料の中に入っているんですけども、0歳がだいたい3人、どんどん増えていくんですけどもね。途中入所がありますので。0歳から2歳ぐらいまでは3人から4人ぐらいずつ、3歳から5歳までも4人から5人、多いところで5人というようなファミリーになって、だいたい1つのファミリーで21人から多くて25~26人になっていくんですけども、そういうふうな形で保育士が3名ついています。

(吉田) フリーの先生がいます。

(家村) そうですね、フリーを結構うちは最低基準以上に配置しておりますので、うまいこと連携を取りながらという形にしております。それで全ファミリー1つのフロアで過ごしています。全部で6つそうしたグループ、ファミリーがありますので、1つのフロアで過ごしてまして、それぞれにお部屋があるんですけども、連携しやすいような形を何とか模索しているというか、まだ完璧ではないんですけども、連携でも工夫というものを心掛けております。

(4) 保護者の戸惑い

(司会：伊藤) 親が親になりきれしていない人もいるように思われる中、戸惑う親はいませんかという質問についてはどうでしょうか。

(家村) 親が戸惑うというところは、やはり最初は戸惑っている方々もいました。入所してきたときに0歳からの異年齢だと知っていたら入所させなかったなんて言われたことも最初はあって、先生方がやっぱりそのときに苦労しました。どうやったら分かってもらえるかなという部分があったんですけども、実際のやっぱり子どもたちの姿を見ていただいていくことでだんだん理解できていったかなというところもありますし、またそう言ってきた親御さんのお子さんが、ものすごく小さい子をかわいがるという姿が出てきたんですね。

その子が入ってきたときにすごくかわいがられていて、それが大きくなって、今度はその子がかわいがるような姿を見て、今ではおそらくすごく喜んでもらっているんじゃないかなと思います。保護者の方にはなかなか難しい方もいますけれども、それぞれ実情に合わせて頑張っていくしかないかなと思います。

結構子育てが大変だという家庭もありますが、下のきょうだいが生まれたときに、親は大変だ大変だと言うけれども、上の子がすごくお世話をしてくれるという姿が本当に多くて。冗談で、お姉ちゃんうちへ遊びにおいでとか何だとかと言うと、お母さんがそれは困る、下の子を面倒見てくれる人がいなくなるというような感じで、すごく上の子を頼りにすることも結構あるかなと。家庭の中でもそういった異年齢の経験というものを歓迎しているといいますか、異年齢の姿に感謝されている部分はあるかなと思います。

(東) 親が親になり切れてないという話は幼稚園・保育園一緒で、これは昔からそう。今はもっとそういう状況があるかもしれませんが、逆に知識があったり、言いづらいですけれども、教育職や保育職の方が厄介。というのは、既成概念が強いので。子どもの姿を見てやっぱり親も学んでいたり、気付くことが多いんですよ。

2月に、月1回おしゃべりタイムという園長が面談をする機会があるんですけど、2人とも卒園児の来室者は、この3年間で本当に子どもが好きになりましたとおっしゃってくれた。偶然ですけども。ですから子どもと生活を共にしたり、幼稚園の場合は子どもの姿を見る機会をつくらうと思えばつくれるので、そういう中で子どもから学び取るとか感じ取るということができて、それが何よりも我々は、先ほどいろいろなことでプロセスという経過をお伝えする手段や伝え方も考えるんですけども、やはりそれ以上におうちへ帰って子どもが話すであったり、子どもの姿から感じることを親を育てていくということだと考えています。

(司会) ありがとうございます。今の先生方のご回答を聞いて、何かまた疑問が追加で出てきたということもあるかと思うんですけど、いかがでしょうか。ご質問をフロアからいただければお答えしていただきたいと思うんですが、いかがでしょう。

(5) 一人一人の育ちをどう担任や保護者に返していくか

(フロアB) 3つの事例・実践とも、子どもが育つということについてあらためて勉強させてもらった次第です。特に考えているのが、やっぱり反省しなくちゃいけないと純粹に思いました。教育が狭くなっているという話もありましたが、やっぱり新しい能力の獲得を発達と見なすような風潮が大きくなっているような気がしてなりません。たかだか45分の授業とか1単元の中での育ちみたいなものを通して早く能力を獲得する子が、できる子なんていう教育観をこの場で大きく壊していただいたような気がして、すごくうれしいです。

授業だけが平等で進められると確信している身にとりましては、教えていただきたいのは、3つの実践とも子どもたちの姿を手持ちの能力でフルに活用しているというんでしょうか、今1年生から6年生まで、あるいは5歳、2歳の子どもたちが今ある手持ちの能力をもつごく全力で活用している気がしてならないです。そしてまた新しい能力を獲得していくんだろうなと思って、それが感動を生み出しているのかなと思ったんです。

そのときに例えば高松小学校さんの場合でしたら、18コースがあった場合、その一人一人の緩やかな能力の獲得の姿をどのように担任に返していくか、あるいは保護者に伝えていくか、36人でしたら36の能力の獲得するすべを、通知表なんだろうか、ホームページなんだろうか、どうやって伝えるんだろうかということにすごく興味を持った次第です。ぜひ機会がありましたら教えていただきたいなと思います。よろしくをお願いします。

(司会：伊藤) ありがとうございます。その辺、例えばお子さん一人一人の育ちというものは、やっぱり保護者の皆さんに返すというのは幼稚園、保育園でもたぶんやっておられると思うので、小学校も含めてその辺の質問も実は次に出てきているものなので、先取りして伺えればと思います。

(前場) ありがとうございます。本当におっしゃる通り、長期的に見るとというのがやっぱり大事なところかなと思っています。本校の創造活動も、即時的に、この瞬間は友達とかかわれているから、関わる力が付いたなとかということはずらずに、やっぱり長期的に見ていくことが大事かなと思っています。

教員の間では「色の会」というのがありまして、職員会が終わった後に行われます。本校でいうと緑組、白組、赤組なんですけど、縦割りでいったら白組さんの先生が全員集まったときに、こういう良い姿があったよとか、こういう問題解決の姿が見られたよということを、学級担任に返せる場を定期的に月に1回持っています。

保護者に対しては、例えば創造活動も3時間創造といって、3時間連続で取るときとかもあります。そのときに保護者に来ていただいて活動を発信したり、通知表がありますので、そこに文章で活動の様子や伸びを伝えたりしています。以上です。

(橘) 縦割り版の学級通信を書いて保護者に配ったりもしていますし、ノートを通じての学業連携もしております。子どもたちが1冊ずつ創造活動のノートを持っていて、そこにしたこととか思ったことをどんどん書きつづっていくんです。それを教師が見てまたコメントを返す。それで子どもがノートを持

ち帰る。親も読む。親もコメントを書いてくれる。そういうやりとりが行われていて、保護者との連携も意識してやっております。

(司会：伊藤) 発寒ひかり保育園さん、美晴幼稚園の方はいかがでしょうか。

(家村) 正直課題は多いです、やっぱり。今子どもたちの姿を一部見ていただきましたけれども、すべてがうまくいっているわけではもちろんなくて、課題も本当に多いんですね。そんな中で我々は、連絡ノートですとかお便りですとか何だとかといういろいろなあの手この手でお知らせするようにはするんですけども、一番大事なのはやっぱり保護者との直接のコミュニケーションかなと。職場・仕事の性質上。そこはすごく大事にしなければなどは思っていますけれども、やはりそこら辺にも課題は多いかなという実状はあります。

(中川) もちろんどの幼稚園さんもそうだと思うんですけど、連絡帳だったり電話で保護者に園での様子を伝えたりというのもあるんですけど、うちの園では週に1回、担任が写真付きのコメントというか、B5のお手紙をご家庭に出して、その子1人だけというわけではなく、クラスの中でこういう育ちがあったというのを全体の保護者にもお伝えできるようにお便りを出していたり、あとはフリーの先生で毎日ポートフォリオを書いています。

(東) 毎日のポートフォリオなんかは、玄関に掲示するんですけども、我々通園バスも利用されている保護者、家庭がありますから、ホームページで必ず閲覧できるように共有化を図るという努力はやはり必要だと思っています。

(司会：伊藤) ありがとうございます。では、高松小学校さんの方に対する質問が結構たくさんあったので、答えやすいところからどうぞお答えいただければと思います。まず、縦割り班の編成の仕方についての質問からいかがでしょうか。

(6) 附属高松小学校への質問ア・ラ・カルト

①「縦割り学級はどう編成されているのか」

(橘) 一学年105名です。6学年630名ですが、通常学級は21クラス、1年生が4クラスで2年生から6年生までが3クラスの21学級ですが、縦割りについては全部で18チームあります。ですので1組、2組、3組が緑組、白組、赤組なんですけど、緑組で6、白組で6、赤組で6の18チームです。

(前場) 補足すると、縦割り学級は先ほど言ったように18学級です。それで出席番号順に並べて機械的につくっています。ただ食べ物のアレルギーの子とかそういった子どもに関しては、担任が見るような配慮をやっていきます。

それで18学級のうち3人、6年生の担任は実は縦割学級を持っていません。それは安全面のことも考慮しつつ、どこか行くときに一緒についていくこともあります。また、やっぱり6年生が要になりますので、6年生と下級生がトラブルになることがあったときに一番入りやすいということで、6年生の3名の教員は色コーディネーターという役割で、安全面については本当に最大限の注意はしております。

②「道徳の教科化において支障はないか」

(橘) これは僕たちはないと思っています。関連する質問として「道徳、特活、総合を学年別を実施する時間はあるか」とありますが、その時間も全くありません。学習指導要領を読んでいただいたら分かるんですけど、道徳が教科化でしようとしている理念と、本校が創造活動の中で価値の創造というところでやろうとしている理念は全く同じです。道徳の時間のように、読み物資料を使って価値を徳目として網羅的に与えていくという方法も1つの選択肢。一方でプロジェクトという子どものリアルな文脈の中で、価値を実感していく、生み出していくというもう1つの選択肢を私たちは取っています。どちらがどうというのではなくて、本校は後者の方を選択しているということです。道徳を含む3領域それぞれのよさを統合しつつ、進めていけるというふうに信念を持ってやっております。

③「子どもたちは創造活動と教科学習をスムーズに移行できるか」

(橘) 2領域ですので、教師とか大人の目では2つの領域は分かれていますけど、子どもの育ちということでは、教科も創造も結局共通点があるわけであって、だからそれぞれ教科学習も子どもたちは非常に創造的に一生懸命やっております。今日の発表の中では入ってないですけども、本校は、教科学習についても特徴的な取り組みがありますので、また資料等興味のある方はぜひお送りしたいなと思っています。

④「他の公立校でも可能なカリキュラムなのか」

(橘) やはり特例校で時間割の編成上いじっているところがありますので、そのまま移行できるとは思いません。ただし創造活動の理念を総合的な学習の時間の中うまく取り入れて、総合自体を変えていく、道徳の流し方を変えていくのは十分可能だと思っておりますし、そうでなければ本校の取り組みはただやっていますというだけで意味がないと思いますので、一般化できるという答えを我々も明示していけるように、これからも研究を進めたいなと思っています。

(前場) 他の公立小でも可能なカリキュラムというところは一番我々が悩んでいるところであり、今後発信しないといけないということもあります。橘も言ったように、例えば今やっている総合的な学習の時間でも、はい、福祉をやるよ、これやるよじゃなくて、一応福祉というくりがありながらも、子どもがこういうのをやっていきたいということを、教師がうまいことお膳立てするとか、意図的につくって行って活動を行うだけでも意欲的になると思います。また、1つのことに対していろいろな価値観をぶつかり合わせるような、そういったところを大切に価値創造を行うということはできるのではないかということは思っています。

⑤「教師の言葉がけの重要性」

(橘) ポイント、ポイントの言葉掛けは当然していますし、影響も大きいです。ですので出どころが難しいんですね。子どもに対しての働きかけは「見取る、考える、返す」なんですけど、あえて返さないこともあるというところがポイントです。返すべきところと、今は返さないで泳がせておいた方が子ども同士で育っていけるということについてはぐっと我慢する。それで我慢してよかったかどうかということをもっと見極めて、また次の支援に生かしていくというふうな「待ちどころ」がポイントです。

⑥「創造活動での個々の力を見取り、評価するのは誰か」

(橘) 創造活動については創造活動の担当が子どもたちを見ております。それで担任教師にも伝えるということですが、前場の方からちょっとありましたけど、個人追求というもう1つの創造活動については各学級単位でやっておりますので、担任が見取っております。

⑦「『望ましい人間像』は実践を重ねてつくられていったのか」

(橘) これは最近実は話題に上がっていることなんですけど、子どもたちがこれから時代が変化していく中で学び続ける、それから関わる、創造するというこの3つが、どの時代、場所、集団にも適応できる力ということで、職員間で話し合っただけなんですけど、やはり多様なプロジェクトをやっている中で、その3つだけじゃないんじゃないかということが最近議論に上がってきまして、そこははっきり言って模索中です。

だからその3つをどうやったら見取れるかということを考えていくんじゃなくて、子どもたちの実際の姿からどんな力が伸びたかということ、子どもの姿をよりどころにしながら、研究の方を変えていかなければいけないんじゃないかということに今のところ思っています。やっぱり頭でっかちになって、そうじゃないとだめとしてしまうと、結局子どもの姿をそこに当てはめて入れ込んでしまうようなことになって研究が止まると思うので、もう一度子どもの姿に立ち返って研究を見直していきたいなという時期に来ております。

⑧「プロジェクトの絞り込みはどのように？」

(橘) 子どもの手で実現可能かどうかとか、子どもが本気になれるかどうかとか、ゴールが思い描けるかどうかとかということをお考えながらやっていますが、ただあまり絞り込みをし過ぎると創造性が失われるので、それぞれの教師がこうやったら子どもが育つんじゃないかということ、やっぱり思い切ってダイナミックにやってみるといことが大切だと思います。やったことに対して失敗があったとしても、それも共有しながらやっていくというふうな学校全体の雰囲気がないと、こういう取り組みは絶対にできません。

⑨「プロジェクトの決定までの教師の意図性と子どもの主体性」

(橘) 子どもたちがやりたいと思っても、教師の目から見て、これはできないだろうと思うことも当然ありますから、時として、先生はこんなのがやりたいんだという教師サイドの考えを出してみることもあります。グループによってはプロジェクト決定までの話し合いが2か月ぐらい続くことがあります。教師の意図性を感じさせないような決定の仕方が望ましいですが、2か月ぐらいの話し合いの中で、教師の意見と子どもの意見がぶつかることもあります。それでも最後はやっぱり教師のほう折れて、うまくできないかもしれないけど先生は全力で応援するからやってみようねということ子どもに伝えます。先生の懐の深さがないと子どもも思い切れないと思いますので、そこは何とかして子どもの思いを実現するように先生も動くということです。

(前場) 創造活動もまだ5年目なので、先ほど橘も言ったように、本当に創造活動のみで関わる力とか学び続けるのか？ そういったところは疑いながら、教員と話し合いながら、新しいカリキュラムをつくっていくことも大事なと思います。1回あるものを壊していかないと新しいものは生まれえないということを我々はいつも言っています。我々が決めたからそうじゃなくて、子どもの姿を見ながら変えて

いくという柔軟性を持ちながらカリキュラムをつくっていきたいと思っています。

(司会：伊藤) 高松小の実践について、今のお答えを聞いてまた浮かんだ質問ともしあれば。

(フロアC) 先ほどの道徳のことだったんですけども、篠原先生とも関係してくると思うんですけども、教科書ができましたので教科書使用義務という、その辺はどうなんだろうと思っているんですけども、そのあたりはいかがですか。

(橘) 研究開発が終わって、教育課程特例校という国の指定を受けた特別なカリキュラムということで現在やっておりますので、それで道徳の教科書を使わずに道徳の時間をやるということは、それは可能です。ただし特例校が終わって、通常の、いわゆる特例校でも研究開発指定校でもない状態に戻った場合には、道徳は教科の中でやっていきます。当然、教科書も使いながら進めていくようになると思います。ただしそれをやっていくときに、創造活動の実践を通して、子どもの文脈の中で、こうやって問題解決を繰り返していくということを経験した我々だからこそ、道徳を教科書の中で閉じた学びにするんじゃなくて、どうやって子どものリアルな文脈に近づけていくのかということは意識してやれるかなと思っています。義務化されていることについては、制度の中では当然守ってやっていきますが、今の経験が、教科化された道徳を実践するときに生きてくるものじゃないのかなということは思っています。

(7) 職員集団としての共通認識

(司会：伊藤) 最後に、これは個人的にすごく大事な質問だと思うのですが、このような実践を各園や小学校で取り組んでおられるわけですけども、そこに先生方が共通して向かっていくときに、どういう工夫といいますか共通理解の上でつくっていくのか、職員集団をどうやってつくっていくのか、ということですね。新しい職員の方が入ってこられるであるとか、あるいはそういった出入りがあるということが当然あると思いますので、そのときに例えば具体的に新しい先生にはこういう説明をしているのか、そういったことを具体的に説明していただけるとありがたいです。

(橘) 本校の教員も、毎年4～5人の異動があります。ですから、創造活動については、その理念などを職員間の中でしっかり共通理解する時間は積極的に作っています。それと先ほどお話ししたように、色の会や雑談を通して、子どもの姿の共通理解もしっかりとやっていけるように意識しています。

それと、我々が研究をやるに当たって絶対にここは欠かせないといけないというのが、まさに目的なんですね。何のためにその研究をやるのか、何のためにそのカリキュラムをやるのかということ間違えると、結局活動ありきのことになってしまって、その活動が先行してしまう。

ジャムを作るにしても、長縄にしても何でも一緒なんですけど、どんな子どもを育てたいのかというディスカッションが十分あって、その上でそのために何をするのかというところの登るべき山のてっぺんを徹底的に話し合う。そこが共有できているから、方法が多様であっても、その1点の共有があるからこそ、それぞれの活動が認められてお互いにリスペクトできるということなので、どんな子どもを育てるのかとか、何のためにこの教育をするのかという、目的の共有は時間をかけてじっくりやっていくということが1点です。

もう1点、建設的な相互批判があるということは絶対で、立場がどうあれ何年目であれ年齢がどうあれ、お互いにそれはこうじゃないかという自分の主張ができたり、それは違うんじゃないかということ

を堂々と批判し合ったりできるような、そういう風土をつくることを意識しています。ですので研究部長がこんなことをやりたいと言っても、それは全然だめだろうということで批判されることもあるし、若手と議論することもあるんですけど、そういう相互批判の中でやっていける健全な組織であることが1つの条件かなと思っています。

(吉田) やっぱ一番最初、取り組むときはみんなで話し合いましたね。徹底的に話し合いましたね。そのときに我々が幸いだったのは、成功実践をしている保育園って全国でたくさんあったんですよね。それはなぜかという、どんどん低年齢児の保育の需要が都市部でどんどん増えてきて、それで年齢別のクラスをつくれなくなったんですよ。それでやむなく混合クラスをつくったり、異年齢で一緒にいたいのがあったんです。

ところが片や田舎の方では過疎化でどんどん子どもが減ってきて、それでそこでもクラスがつくれなくなっちゃったんですよ。それでとにかくごっちゃんにやろうという、これは複式みたいな感じですよ。そういうのが結構早い時代から、30年ぐらい前からそういう現象が起きてきたんです。

僕たちもそういうのを見聞きしていて、お、これはよさそうだな。これは理念的な実践なんですよ。よさそうだなということがあって、じゃあ、やろうかとやむなくやっちゃったみたいなね。園長がしょうがないからやるぞと言ったとかそういうところと理念型とがあって、それは僕のブログに書いてありますが、それで実践例がたくさんあったんですよ。

そして見学に行っても、これはよさそうだなというのが実感できたんですよ。それで園長たちに、「スタート大変でしょう？」とかと聞いたら、「いや先生方も大変ですよ」と。子どもはすぐ慣れましたとかそういう話を聞いて、そしてどんどん見学に行ってもらったり、体験してもらったりして始めました。

始めたらもうこっちのもので、どんどんいろいろな姿が出てくるでしょう。まずファミリーの日をつくった1日目、ファミリーの名前を付けようとやったんですよ。3歳、4歳、5歳がいるでしょう。それで大きい子がかっこいい名前を付けたいんですよ。それでリーダー的な男の子が、何だっけな、「いるかファミリー」とかやりだしたわけ。

そうするとリーダー的な男の子ですから必ず親衛隊の女の子がいて、そうだね、そうだねとやるんですよ。そして決まりそうになったら、3歳の女の子カオリちゃん(今京都にいますけど)、カナコ先生という2人(カナコ先生は現在発寒ひかり保育園勤務の元園児-編者)が、0歳児の異年齢保育が始まったときの1期生ですね、「ぜったいうめぼしファミリー」と言ったんです。「えっ？」とリーダーも取り巻きの女の子たちも固まって、それで5歳児の男の子が説得しようとしても、絶対「うめぼし」がいいって何回も頑張ったの。そうしたらやっぱり男の子も、そうかなとね。小さい子の意見も取り入れてもいいのかみたいなね。ちょっとプライドは横に置いておいて、取り巻きの女の子も横に置いておいて、じゃあ、「うめぼしファミリー」にしようとかと言って、「うめぼしファミリー」に決まったんですよ。

その年長の力関係を、3歳児の女の子が打破したんですよ。すごいって。ここから始まったんです。そしていろいろな姿が、さっき言ったように3歳、4歳、5歳じゃあんまり本当にいい姿ってなかなか出てこないんですよ。それからやっぱり年齢クラスが中心だとなかなか出てこないんですよ。年齢クラスの仲間関係が強くてね。

それでやっぱり2歳の上の子、2歳半ぐらいの子を入れるようになって、そして小グループでやったら、たくさんいいかわりが出てきたんですよ。そういうのを見てみると、やっぱりいろいろと疑問があったりなんざりしても、自分たちもいいね、いいねみたいになってくるんですよ。でも途中途中

いろいろな疑問も出てくるんですけど、研究をすると確認ができるんですよ。やっぱり今やっていることはいいよねと確信を持たたかなみたいな感じになってくるので、研究と実践がやっぱり大事なんじゃないかなと思うんですよ。

(司会：伊藤) ありがとうございます。東先生。

(東) 短く。これが課題だと思います。ただ新卒とか若い職員は柔軟ですし、今、養成校の指導というか教育自体が、まさに柔軟な保育に対応できる教育を受けてきている保育者ですので、そこはあんまり心配ないと思うんです。

ただ多様な子どもたちと付き合うと、プロトタイプというのはなかなか見いだせないですね。集団としても一人一人としても。そこで悩みだとか自分自身の保育者とか人間性に逆にはね返ってしまって、有用感とかというのを感じられなくなるのがたぶん多いと思うんですね、ほかの保育と違って。そこをしっかりと踏ん張って、その時期を乗り越えられるかどうかというのが、支え合いだとか園長としてどういうふうに導いていけるかというのが課題のような気がします。

実際の実践の中にいると子どもから学べますし、我々はこれが正解という保育をしてないので、必ず最適解を一人一人と集団の中に求め続けるという保育なので、それに腰を据えて臨めるか、やっぱりそうじゃなくて短いレンジというかタームで何か自分の満足もないと、教員として自分の有用性、有用感を持ってないというところの、一人一人の個性にもよるんですけど、それがやはり難しいなということが言えると思います。それはベテランでも若い職員でも結局同じで、そこが一番どのような教育・保育にするにしても課題になるんじゃないかなと考えています。

(吉田) ちょっとごめんなさい、園長はやっぱりかっこよくまとめちゃったかなみたいな今反省がありまして、現場の保育士はいろいろと苦労しているはずなんですよ。ちょっとそのあたりもお願いします。

(家村) そうですね。今の話を聞いて、やっぱり保育士不足で本当にせっかくここまで育った保育士に簡単に辞められちゃったら困るなというような悩みとかもあって、やはりみんながどうやってやりがいを持って仕事できるかなというのは、すごく大事にしているところでもあります。

私自身もやっぱり20年間ずっと保育士をやってきていますが、何でこんな安い給料でずっと頑張ってきたんだろうと思うんですけども、やっぱり子どもの姿とか成長、自分の置かれている立場というものが何となく見えてくると、否が応にもやっていけるようになってきたかなという部分と、あとはやっぱり保育を進めていく上で、自分の置かれている立場という部分もちょっとと思うと、やっぱりこの中にも新任の先生方がいらっしゃるかもしれないですけども、現場の味方にならないという言い方は変ですね、やっぱり立場的には園長寄りというか、園長の言葉を代弁する立場じゃないといけないかなという、組織のあり方としてそこはすごく大事なと。

なかなか1つのことに向かってやっていくとなったときには、現場と一緒にってそんなのダメだ、ダメだとなっていったら、やっぱりいけないと思いますので、一生懸命どういう意図なんだろうというのを理解するというのを心掛けるようにはしています。

(開場笑い)

(司会：伊藤) ありがとうございます。中川先生、一言いいですか。

(中川) 今お話を聞いて、そうだな… (開場笑い)、園長先生が何を考えているのか…

(東) 分かりづらいよね。

(中川) はい (笑)。それを若い先生たちに通訳をして伝えていかなきゃなど、はい。

(開場笑い)

(司会：伊藤) ありがとうございました。とても白熱した議論といたしますか、とてもいろいろな質問に対して誠心誠意をもって答えていただきましてありがとうございます。もう一度、皆さんに拍手をお願いします。

(開場拍手)

(編集責任：教育学研究院・川田 学)